

二枚の絵における幕間に関する一考察 —ジョン・エヴァレット・ミレイ作  
《わたしのはじめての説教》と《わたしの二回目の説教》に着目して—

九州大学大学院 博士後期課程 古賀 詩織

本発表では、19世紀イギリスの画家ジョン・エヴァレット・ミレイ (Sir John Everett Millais, 1829-96年) による二作品《わたしのはじめての説教》(1863年) (以下、《はじめての説教》) と《わたしの二回目の説教》(1863-64年) (以下、《二回目の説教》) について、二枚で構成された絵の形式を「幕間」の観点から検討する。

ここでの「幕間」とは、ロイヤル・アカデミー展で《はじめての説教》が発表された1863年から翌年のアカデミー展で《二回目の説教》が発表されるまでの一年間を指す。二作品には、《はじめての説教》で説教者の話に恭しく耳を傾ける少女が、《二回目の説教》では居眠りしている姿が描かれ、時系列に沿った場面展開が見られる。とくに《二回目の説教》はパメラ・フレッチャーによって「続編の絵画 (sequel paintings)」とされ、二つの絵は二部作として位置付けられている。そして、同時代の作例や批評から、当時の鑑賞者が二部作として構成された絵を鑑賞するための視覚的な約束事に精通していたことが主張されているが、《はじめての説教》と《二回目の説教》の形式がもつ同時代的な意義についてより深く考察するためには、二作品がもつ時間的な隔たりについて制作と鑑賞の両面から検討する必要がある。

したがって、本発表では、《はじめての説教》と《二回目の説教》の展示における一年間の幕間が二作品の制作上、および作品の鑑賞においてどのような意味をもたらしたのかを考察する。はじめに、二枚で構成された絵の歴史的な背景を整理する。次に、《はじめての説教》と《二回目の説教》の制作プロセスと対の形式をもつ同時期の作例との比較から、ミレイがどのように二作品を構想したのかを考察する。さらに、同時代の鑑賞の場では《はじめての説教》と《二回目の説教》の二部作としての形式がどのような解釈をもたらしたのかということを検討する。具体的には、一作目《はじめての説教》発表時の批評と、二作目の《二回目の説教》発表後の一作目の批評を比較することで、絵の解釈がどのように変化したかを探る。最後に、《はじめての説教》と《二回目の説教》をミレイの対作品研究のなかに位置付け、二枚で構成された絵の鑑賞上の意義を示すことを今後の課題として提示する。